

47都道府県別 事務所規模RANKING「中国・四国」編

FIVE STAR MAGAZINE

士業専門誌

2024.07 81

年間購読/年間6冊・36,000円(税別・送料込)
発行/LIFE & MAGAZINE 株式会社
◎本誌は以下の事務所にお届けしています
税理士、司法書士、弁護士、行政書士、社会保険労務士
など(購読者の多い順)

NOTHING IS

impossible

経営歴 40年弱
40年超 の経営者からの「教え」
50年超

LESSONS OF THE LIVING LEGENDS

士業事務所のための経営専門誌
The Magazine for Professional Firms

ChatGPT-4o OMNI の衝撃

取材／セブンセンス税理士法人（東京都台東区）ディレクター 公認会計士・税理士 大野修平氏

ChatGPT-4o（フォーオー）の「o」は、Omni（オムニ＝「すべての」の意）から取られているという。すべての常識をひっくり返しかねない衝撃の新モデルの登場で、何が変わったのか？ 何が変わるのか——？ 先端テクノロジーに精通する、セブンセンス税理士法人ディレクターで、公認会計士・税理士の大野修平氏に話を聞いた。（文・武田司、GPT-4o）

タイミリミットは「あと3年」

—大野先生は ChatGPT-4o 登場までの ChatGPT や AI について、どのような印象をお持ちでしたか？

大野：私が独立したのが、ちょうどクラウド会計ソフトが世に出てきた時期で、すごいスタートアップが出てきたなど感じていました。しかしこれで、私たちの仕事がなくなることはないだろうと思っていました。

その後に RPA が出てきて、業界は大騒ぎになりましたが、私は RPA に関してそれほど重要視していませんでした。これで仕事の効率化は進むかもしれないけれど、専門家が知識を集積し、判断

したり意思決定する仕事が脅かされるわけがないと思っていましたし、今でもそう感じています。

—そうこうしていたら、ChatGPT 3.5 が出てきました。GPT では、プロンプトを入力すると、無から有が生み出されていきます。その姿を目の当たりにして、これはすごい技術だと驚きました。

—ChatGPT 登場までは、情報を二次加工するだけの技術だったのですが、ChatGPT はまさに生成や創造を行っているということですね。

大野：でも、3.5 のバージョンではたくさん回答の間違いがあり、ハルシネーション（もっともらしい嘘をつく現象のこと）などの問題もあって、メディアなどでは面白

おかしく取り上げられていました。

その後 GPT4 が出たのが、約一年前の3月15日。確定申告の日だったので、税理士で GPT4 をその日に触った人はほとんどいなかったと思います。業界も騒いでいませんでしたが、私はその性能の高さに驚いていました。

さらにその一年後に、4o が出たのです。4o は処理スピードも早く、正確性も今までより高くなっているように見えます。しかし、正直に言えば、私は 3.5 に触れたときからここまでの進化は予想していました。むしろ、これから先がどうなるのかのほうが興味があります。

—それはどのようなものですか？

大野：おそらく、ホワイトカラーの仕事はほとんど代替されるだろうということです。だから私は最近、ピザづくりの研究を始めています（苦笑）。これは冗談のように言っているんですけど、半分本気で、そのくらいホワイトカラーの仕事がなくなっていくと考えています。

それがいつなくなるのかは分かりませんが、10年などの長いスパンではなく、良くて4～5年、下手すれば3年のうちになくなると私は考えています。

今現在も、なくなっていく途上にあるのだと思います。すでに戦えているのか分からないほどになっていますが、とりあえず現時点では、それが露見せずに、仕事ができているだけだと思います。

—それだけ、AIの進化が進んでいるということですね。

大野：今回の4.0を皆すごいと言いますが、今回のアップデートは、あくまで一年前に出た4のマイナーアップデートです。それでも、これだけできることが増えています。

—なるほど。4.5でもなければ、5でもないということですね。

大野：4.0で機能が追加され、AIは賢くなり、すでに人間の能力に追いついた感じがしています。

かつてシンギュラリティ（AIが人間の知性を超える転換点）は2045年ころに起きると言われていましたが、今の状況を見ると、2027年や2028年にシンギュラリティが起こっても不思議はないと思います。

—もはや太刀打ちできないのなら、AIを活用しようと努力してもしょうがないのでしょうか？ そうは言っても、大野先生はChatGPTを使いこなそうとしていますよね。それはなぜですか？ 使っていて楽しいからですか？

大野：楽しいし、恐ろしいです。

私は所属税理士ですが、経営に携わると多くの人を背負うことになります。未来の予測がで

きないままに、他人の人生を背負うのはあまりにも怖いことです。自分自身の人生においても、最先端の技術に触れないまま、意思決定をすることは危険だと感じます。

現在の流れがどこに向かおうとしているのか。それを察知し、適切な判断をしていくためには、この最先端の技術に触れていかなければならないと感じています。AIと真っ向勝負するのではなく、彼らと一緒に働く道を探している感じですね。

処理能力も コミュニケーション能力も、 人脈さえ敵わない

—「ほとんどが代替される」と先生は言いましたが、その後の世界がどうなるかはどのように考えていますか？

大野：全ての人の仕事がなくなるわけではなく、上位層の仕事は残ると思います。生成AIではできない意思決定や創造性のある仕事ができる上位10%の人たちの仕事は残ると思います。

しかし、その他90%の人は不要になります。今までは機械処理をするために人の手が必要でしたが、それさえも不要になっていきますので。

—一般的に、AIが発達すると、人間にしかできないコミュニケーション能力が問われるようになると言われていました。だから専門家も、コミュニケーション能力さえ高めていけば、生き残っていけると考える人が多いと思います。

大野：ChatGPTより上手にコミュニケーションを取れる税理士がどれくらいいるのかという話ですよ

ね（苦笑）。コミュニケーションが上手な人たちは、大企業に就職して活躍しています。私も含めて、それができないコミュニケーションが苦手な人たちが、資格を取って仕事をしているのではないかと、いう仮説を持っています。

—なるほど。それに顧客側もよほどコミュニ

ケーション能力が高い人でない限り、AIとコミュニケーションを取った方が良いと思うようになっていきますよね。

大野：そうだと思います。例えば、私が事務所で「頭が痛い」とつぶやいても誰も何も言ってくれませんが（苦笑）、ChatGPTに話すと心配してくれたり、対処法を教えてくださいました。知らない薬の名前が出てきて質問したら、それについても詳しく教えてくださいました。それで発想が刺激されて、「その薬を使ってビジネスができそうだね」と話したら、ビジネスモデルを作ってくれます。

これに太刀打ちできるコミュニケーション能力を持っている人間が、世の中にどのくらいいると思いますか？

—たしかに、医者に聞いてもビジネスモデルが作れるとは限らないですし、経営者に聞いても医療のことは分かりませんよね。だから、ChatGPTはオールマイティだということですね。

大野：すでに多くの便利な「GPTs」（特定の目的に合わせてカスタマイズしたボットのこと）が作られています。今はそのGPTsをチャットで呼び出せるようになっています。

その呼び出し方がまた憎くて、「@」を付けて呼び出すのです。今まではアットマークで呼び出す相手は人でした。それで、その人にチャットして、質問に答えてもらったり、仕事をお願いしたりしていました。しかし今は、その相手がGPTsになっています。

—これまで人脈やネットワークでやってきたことが、これからは、有能なGPTsを持っているかどうかの話になるということですね。

では、どのように 活用していくべきか？

—GPT-4oでは、写真をアップロードして文字を読み込む機能が強化されました。これにより、さまざまな業務に応用できる可能性が広がりました。



セブセンス税理士法人 (東京都港区)
公認会計士・税理士、ディレクター
大野修平

大学卒業後、有限責任監査法人トーマツへ入所。金融インダストリーグループにて、主に銀行、証券、保険会社の監査に従事。トーマツ退所後は、資金調達支援、資本政策策定支援、補助金申請支援などで多数の支援経験を持つ。また、スタートアップ企業の育成・支援にも力を投入しており、各種アクセラレーションプログラムでのメンタリングや講義、ピッチイベントでの審査員や協賛などにも精力的に関わっている

大野: これも恐ろしい話ですよ。以前は日本語の OCR 機能は性能が低かったのですが、今は非常に「目」がよくなっています。一反応の遅延なく音声会話ができるようになってきました。

大野: 「耳」も「口」も良くなりましたね。どうでしょう(苦笑)。一セブセンスさんでも、ChatGPT の活用は進んでいると思いますが、どのようなことに使っていますか？

大野: 私たちは、事業計画書の作成を強みの一つとしています。事業計画書を作成し、経営改善をサポートしたり、それを基に資金調達を行ったり補助金の申請を行ったりしています。

その元となる事業計画書の作成は、今や ChatGPT なしでは考えられなくなっています。特に活用しているのがマクロ分析です。会社の現状や今後の計画などは社長にヒアリングすればよいのですが、業界のマクロ分析は難しいもので、以前はさまざまな資料を参照し、多くのデータを収集しながら作成していました。しかし、今ではアウトラインであれば、ChatGPT で瞬時に終わります。あとは、その出力結果が合理的かどうかを判断すればいいだけです。ですから、ChatGPT によって大きく仕事が変わりました。一士業では、ChatGPT をメール文章や相談

に対する回答の下書きづくりに使っていることが多いのですが、どのように ChatGPT を使っていけばよいのでしょうか？

大野: まずは、そうしたメールの作成や議事録などの作成から使い始めればよいと思います。まずは、常に側に GPT を置いておくことです。

GPT は言葉を操るのが得意なので、キーボードに手を置いた時に、自分で指を動かすのではなく、まずは GPT にやらせてみる。その習慣をつけることが重要です。それができてきたら、あれもできるかもしれない、これもできるかもしれないと、自然に発想が広がっていきます。

一何に使えるかを考える前に、まずは使ってみるということですね。

大野: イメージとしては、スタッフと一緒です。スタッフ個々人に何ができるかなんてやらせてみないとわからないし、そのスタッフと常にコミュニケーションしていないと想像もできません。それと同じで、いったん GPT にやらせてみる。やらせてみることで、何をどこまでできるのかが分かるようになりますし、上手な指示の出し方なども分かってきます。

生身のスタッフは給料をもらっているのですが、多少指示が悪くても上司を付度し、察しながら動いてくれますが、GPT は指示した通

りのことしかやらず、指示が不適切であればうまく動きません。だから、まずは使ってみて慣れていくことが大切です。

一なるほど。使ってみてから、用途を決めていけばいいんですね。

大野: 先日、コンビニの栄養ドリンクコーナーの棚の写真を撮り、「風邪の時に飲むならどれが良いか？」と ChatGPT に質問しました。そうしたら、「右下棚のものにはビタミンが含まれているから良い」とか、「上部にあるインゼリー系はエネルギー吸収効率が良い」などと教えてくれました。写真に成分などの表示が映っているわけでもないのに、写真だけで判断して教えてくれるのです。

それができるなら、レシートからインボイス番号を抜き出すこともできるでしょう。それをスプレッドシートにまとめて一覧を作成することもできるはず、などとアイデアが広がっていくと思います。

そうやって、さまざまな仕事に GPT を使っていけばいいと思います。

一なるほど。私も、まずは徹底的に使ってみたいと思いました。本日は貴重なお話をありがとうございました。■

次号の特集では、各業界での ChatGPT-4o の活用についてを、各士業の識者に取材し、さらに詳しく深掘りしていきます